

## ならちゅうしん経営研究会 例会報告

### 第 308 回 研究会 （新春セミナー）

- ◆日時 平成 29 年 1 月 19 日 （木）
- ◆場所 榎原ロイヤルホテル
- ◆講師 上方講談師 旭堂 南海さん
- ◆内容 **第一部 講演**  
「講談師みてきたようなウソをつき」  
～物語をおもしろくご紹介するノウハウ～  
**第二部 講談**  
「赤穂浪士」

今回の新春セミナーは、上方講談師の旭堂南海さんを迎え、開催しました。

最初に寺井会長より、新年のご挨拶があり、今年の干支である丁酉（ひのととり）に因んだお話を頂き、新春セミナーを開講しました。

今回の講師としてお迎えした旭堂南海さんは、兵庫県加古川市のご出身で、昭和 39 年 4 月お生まれの 52 歳です。大阪大学文学部で国文学を専攻され、大衆芸能に興味を持ち、落語、浪曲に取り組み、最後に講談に辿りつかれたとのこと。大阪大学在学中に出会った、3 代目旭堂南陵師匠の下に平成元年に入門され、平成 9 年には大阪市より大阪文化の振興に貢献し将来の大阪文化を担う人材に贈られる「咲くやこの花賞」を受賞されています。（その年は歌舞伎役者の片岡愛之助さんも受賞されています）また、奈良テレビ放送「ざっくばらん」にメインキャスターとして出演されていたこともあり、奈良には大変ゆかりの深いかたです。

第 1 部講演は、「講談師みてきたようなウソをつき」～物語をおもしろくご紹介するノウハウ～と題してお話を頂きました。まず最初に講談の歴史をご紹介頂きました。講談の発祥は古事記を編纂した太安万侶に神代からの話を聞かせた稗田阿礼に由来するとのこと。最初は人の集まる場所で書物を読み聞き手からお金を得る生業でした。それが物語を覚えて話す講釈となり、講談が生まれました。街を往来する不特定多数の通行人に話を聞いて貰うためには聞き手に話を面白く伝える必要があります。「話を盛る」と言いますが、聞き手の興味を惹くためには随所に、楽しいウソを織り交ぜたり、卓越した知識を披露したりすることが大事です。南海さんは『大石内蔵助良雄、原惣右

衛門元辰・・・』と赤穂浪士四十七士全員をフルネームで暗唱する技能を示され、参加者から拍手喝采を受けました。お話は赤穂浪士から、武田信玄、真田幸村、徳川家康、井伊直政・・・とテンポよく展開されました。



企業経営においても、顧客や取引先、従業員に重要なことを伝える時にはトップが生の声で喋るのが効果的です。聞き手を惹きつける話法の習得、今回の講演を参考にしたいと思います。

第2部講談は、演目「赤穂浪士」の中から、赤穂四十七士堀部安兵衛の介錯人を務めた松平隠岐守家臣荒川十太夫のお話でした。堀部安兵衛は高田の馬場の仇討ちでも有名な豪傑でした。吉良家討ち入りを幕府に咎められ、元禄16年2月4日に四十七士の切腹の儀が執り行われました。安兵衛は切腹の儀の際も終始堂々とした振る舞いでした。その介錯人に任じられたのは足軽身分の荒川十太夫でした。切腹の直前、介錯人の十太夫は姓名と身分を質問されました。十太夫は「この忠義の侍が、たかが足軽、三両五人扶持の自分に介錯されて命を散らすとなれば、どれほど寂しい思いをするだろう」と思い、とっさに「物頭役（現在の会社でいう取締役）三百石でござる」と身分を偽りました。すると安兵衛は「そのような身分の高い方に介錯をしていただけるとは、天下の罪人に過分のお心遣い、厚く御礼を申し上げます」と笑って冥土に旅立ちました。

十太夫は安兵衛に身分を偽ったことを深く悔いて、家に帰ると切腹しようと思いました。しかし妻に事情を話すと妻に止められ、ある行動を決意しました。それから夫婦は儉約し、1年後の命日、十太夫は物頭役に相応しい着物を着用し土産の饅頭を持ち安兵衛の墓がある高輪の泉岳寺に参り、安兵衛の墓所で泣いて詫言しました。それから毎年、安兵衛の命日である2月4日には松平隠岐守物頭役荒川十太夫として墓参りを続けました。7回忌のとき、同様に墓参りをしていると、運悪く家老（重役）に見咎められました。それで殿様に、これまでのことを懺悔しました。すると殿様は痛く感動し、十太夫を本当の物頭役に任命しました。「騙されて心地よく咲くもろの梅」人を思いやる良いウソは真実になるという人情あふれる講談でした。

